

Gaia Philharmonic Choir 第16回定期演奏会曲紹介

1st Stage

「Ave Verum Corpus」はカナダのイマント・ラミンシュ(1943-)の作品です。この曲は、キリストの十字架刑が黙想される聖体聖歌のテキストに合わせて作られています。キリスト教の信者に、苦しみを理解し、癒しと贖いとの関連性を教えるものです。最初の節では、聖母マリアとキリストの体に言及したテキストの上に、長く持続する音とフレーズが表れる。次の節は、キリストの苦しみと、十字架に固定するために体に穴を開けることが描写されると、よりリズミカルなものになります。より流れるようなフレーズは、キリストの最期の前に、血の流れを表すために戻ります。

「Soneto de la Noche」と「Sure on this Shining Night」は『Nocturnes』という組曲内の2曲。米国の国民芸術勲章受章者であるモーテン・ローリゼン(1943-)により作曲されました。

「Soneto de la Noche」は、チリの詩人で元外交官、ノーベル文学賞受賞者のパブロ・ネルーダ(1904-1973)の詩に合わせたものです。「Soneto de la Noche」では、主人公が恋人への最期の願いを非常に感情的な言葉で表現しています。恋人との思い出や最後の触れ合いの場面です。恋人に自分の死後も幸せで穏やかな人生を送り続けてくれることを祈ります。そしてそれを天上から見守り、あの世で待っているということも表現しています。

「Sure on this Shining Night」は、米国の作家ジェームズ・エイジー(1909-1955)の詩に合わせて作られています。主人公が星に満ちた夜空という不思議を、涙の滲んだ目で見つめています。他界した大事な人が天上から優しく見守ってくれているのを感じ、さまよいいます。

「Omnia Sol」は、米国のZ. ランダル・ストループ(1953-)によって作詩作曲されました。別れのテーマが強く表れていますが、人生を通してずっと過ぎていく出来事、出会い、交流、そして支えてくれた人たちへの感謝と愛の言葉を伝えることの、人間としての必要性も表現されています。詩のほとんどが英語で書かれていますが、『カルミナ・ブランナ』の詩から引用されたラテン語も使用されています。ラテン語で書かれた内容は、親族関係や周囲の人々とのつながりをメタファーで表しています。太陽の光は、私たちが日常的に他者との交流の中で与える光に相当します。私たちが誰かと過ごす一瞬一瞬に、私たちは魂のかけらを残していきます。年を取り、その人たちと距離ができるても、それぞれの魂のかけらは互いの中に残ります。つまり、「別れ」はないということです。

(解説 ブライアン・ムンギア)

2nd Stage

Here the deities approve「ここに神々はよしとし給う」 H.パーセル(1659-1695)作曲

ヘンリー・パーセルは、バロック時代のイギリスを代表する作曲家です。イタリア・フランスの様式とエリザベス朝時代の多聲音楽とを融合し、イギリス・バロック音楽を創出しました。オペラ、教会音楽など400曲以上の作品を残しています。この曲は、1683年にロンドン音楽協会により、聖セシリアの祝日(11月22日)の演奏のために書かれた作品です。テキストは、クリストファー・フィッシュバーン。作詩のオード(頌歌)「Welcome to All the Pleasures(すべての喜びへようこそ)」で、音楽の守護聖人、聖セシリアに敬意を表しています。

編成は、ボーカルソリスト、コーラス、そして4部構成の弦(第1、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ)と通奏低音を奏するバロック楽器のアンサンブルで、第3曲目であるアルトのアリア「Here the deities approve」は、演奏の瞬間を共有する人々への感謝の念を歌っています。

Messiah「メサイア」 G.F.ヘンデル(1685-1760)作曲

8. Recitative(Alto) Behold, a virgin shall conceive,

「見よ、処女がみごもって」

9. O, thou that tellest good tidings to Zion,

「シオンに良い知らせを伝える者よ」

バロック時代の最高傑作の一つに数えられる名曲、オラトリオ「メサイア」は、1741年ヘンデルが56歳の夏に、わずか24日で書きあげられたと言われています。しかし初演されたのは、翌年4月の病院での慈善演奏会でした。これには、聖書の中でも最も重大なテーマである「メサイア」=救世主キリストのドラマをどう扱うべきか、ヘンデルの教会への慎重な態度があったのではないかとみられています。初演が大成功を収めた後も、ヘンデルは何度も再演を繰り返し、演奏の度ごとに改作しています。現代の演奏バージョンになったのは、初演から約10年経った時期とされています。「メサイア」のテキストは、ヘンデルと同時代のチャールズ・ジェネンズ(1700-1773)が、旧約・新約聖書から抜粋して作ったものです。ジェネンズは、ヘンデル音楽の心酔者であり、それまでもオペラの台本を書いていましたが、「メサイア」の作曲を強く勧めたのも彼でした。その背景には、キリスト教思想の擁護という思惑があったと考えられています。第8曲「見よ、おとめがみごもって」と第9曲「シオンに良い知らせを伝える者よ」は、受胎告知からイエス到来までの場面です。華やかなアルトソロに続き、合唱がソプラノを先導に、ひとパートごと加わり、救世主の誕生した喜びを歌っています。

<参考文献>

三ヶ尻正 著『「メサイア」ハンドブック演奏者・鑑賞者のために』(1998) 株式会社ショパン

河村泰子 著『ヘンデルの「救世主」』(2007) バッハ・コレギウムジャパン<メサイア>コンサート

The Flower of Magherally「マハラリイの花」 アイルランド民謡

とても美しく切ない旋律が魅力の北アイルランド地方の民謡です。これまで、様々なジャンルのアーティストにより、多様な編曲で演奏されています。本日の演奏楽曲は、アイルランドで活躍する合唱作曲家マイケル・マクグリン(1964-)によるもので、伝統的なアイルランド音楽の要素を組み合わせた作品が得意な彼ならではの、ソロパートが際立つ美しい和音が響く構成になっています。「マハラリイ」とは、北アイルランドにある小さな町の名前で、そこに住む異教徒の女性に恋した男性が、宗教を超えて私たちは結ばれる、と歌うラブソングです。

(解説 戸谷 登貴子)

3rdStage

「この星の上で」は、5曲からなる組曲です。2005年に女声合唱版が作曲され、その後混声版、男声版にも編曲されました。混声版の初演から15年、本当に様々なことがありました。そして、今だからこそ、この作品を歌いたいと、団員一同の思いが合致し今回の演奏曲に選びました。2006年に弊団が混声版を委嘱初演した演奏会での、作曲者の楽曲解説をご紹介します。

この組曲のテーマは、『生』。私たちは、有機的にあらゆる自然と結びついている。そして、絶妙なバランスで「生き合って」いるのだ。この世のすべては生命体なのだった…。

はる

いま、自分は生きているよ、ありがとう、私は神様に感謝する。届託のないイノセントな祈り。
大人は忘れてしまった、感謝の気持ち。

地球の客

いま、「自分は」生きている。「自分が」生きるためにには、どんなことをしてもいいのか。私たちが住む、この地球
だって生きている。地球が病む、ということは、自分自身が病むのだ、ということを知らない愚かな人間達。

おべんとうの歌

奇跡のとき、おべんとうのとき。家族の愛情に包まれて、あまりにも幸せな自分に気付く。
愛の享受は簡単。愛の贈与は難しい。
どうしても書きたかった曲。私なりのレトリックを楽しんでいただければ、と思う。

ほほえみ

歌が書きたかった。私は、『歌』を書こうと思ったのだ。人間の苦しく、醜い姿を歌にして。

今年

生きてゆく限り、否むことの出来ぬ挫折、断念、焦燥、苦悩。そして、生きてゆく限り、否むことの出来ぬ
希望がある。
宇宙の膨張開始から約200億年と言ういま、その年月からみて、80年という、人間から見たセミの一生にも
満たない人間の一生を、精一杯生きている、否、生きようとしている我々への讃歌である。
我々は生きなければならない。そして、だからこそ、生あるものは尊び、うやまわねばならない。それが、
少なくとも宇宙の創造主への、最低の礼儀である。
そのことを忘れて我々のために走り続けた時代、人間中心の時代は終焉を迎ねばならないだろう。
大地震、津波、記録的な大雪、旱魃
……この、神の御業に対し、今回ばかりはノアの方舟すら、用意されていない。